

第四回 カナダ移住

スケートリンクの氷の表面を一心不乱に、ほうきでお掃除するように掃いているスポーツを見ました。最初は、何をしているのかと思いました。最近、ほうきからブラシに代わっていますが、カーリングというスポーツです。カナダで最初にこれを見た時、世界は、広いなあ〜と感じました。

高専を卒業して、翌月から父の鉄工所で働き始めました。それと同時に、英会話を習う学校を小倉で探しました。ところが、当時の小倉には、そういう英会話教室がなく、やっと、見つけたのは小さな教室で、習う人も数人程度のため、しっかりとしたプログラムがなく、本格的な学習は出来ませんでした。そこで、NHKの英会話番組でそれなりに勉強したのでした。で、半年後、一応、溶接の技能工として移住申請書を出しました。すると、東京のカナダ領事館から面接試験をするとの連絡がありました。書類審査は合格したのです。早速、夜行で東京へと向かいました。今度は、英会話力の審査です。直接、カナダ人の事務官から次々と質問をされました。ところが、残念な事に、全く判らないのです。日本人の通訳の人の助けで、やっと、色々とその質問に答える事が出来ました。で、結果、思った通りの不合格でした。その際、3ヶ月間ほど英会話を勉強すればOKするとの事でした。しかし、僅か3ヶ月間で英会話が上達するとは思えず、頭を抱え、取り敢えず小倉へ戻る事にしました。その途中、伊豆の修善寺に立ち寄りしました。小さな宿に泊まり、どうするかを考えました。そして、もう半年間小倉で頑張り、お金を貯めて、翌年の4月から東京に出て英会話を学ぼうと決めました。その後、お金を貯めるため、父の鉄工所で働きました。機械工学科を専攻していましたので、最初から図面を読むことが出来、原寸を引いたりしましたが、仕事内容は大手の下請けのそのまた下請けの様な現場仕事でした。それから半年間、お金を貯めて東京へ向かいました。やはり、東京は小倉と違い、色々な所に英会話学校が多くありました。そして、選んだのが目白駅近くにあったR学園です。東京では、3畳一間の部屋を借りての自炊生活です。でも、台所はなく、電熱器に鍋をのせてラーメンを作る程度の部屋でした。卒業後一年間ほど働き貯めたお金をもとに学費を出し、自活をしたのです。でも、時々、足りない分は、新聞で見つけた小さな鉄工所でパートの仕事をして働きました。4月から7月末までの4ヶ月間、英会話漬けでした。そして、8月上旬になって、再び面接です。今度は、英会話も上達していましたので、通訳なしに審査官の質問に直接答えられました。そして、晴れて合格です。そこで、カナダに行く前に、カナダ新移住者を対象にした一ヶ月間の合宿セミナーがある事を知り、参加する事を決めました。出席してみると、23人ほどの中に、何と6人の独身女性がいるのです。この事には、少し驚きました。ええ〜！！どんな女性がカナダに一人で行くのか、と、不思議に思いました。また、参加者の年齢は私が一番若く、また、30歳代の既婚男性もいました。平均26、7歳でした。セミナーは午前中にカナダについての講義があり、午後からは、主に英会話のクラスでした。そして、セミナーが終える頃には、私の懐にはもう貯金と言えるお金は残っていませんでした。また、カナダまでの飛行機代もままならず、結局、父から飛行機代を工面してもらう事になりました。

忘れもしません 1968年10月13日、その日は、日曜日でした。羽田から一路バンクーバーへとカナダ太平洋航空のジェット機で飛んだのでした。生まれて初めての飛行機で、生まれて初めての外国の地でした。夕刻に発ったのですが、バンクーバーに到着した時刻は現地で、同日の午前10時頃でした。その日は人

生で一番長い一日となりました。その日から、私のカナダでの生活が始まったのです。

小さな、古い型の角ばったスーツケース一つ（今でも、保存しています）と、航空会社から貰ったショルダーバッグだけでした。それに、ポケットには、175カナダドルと5,000円札一枚でした。その頃のカナダドルは、1ドル333円の公定レートでしたので、日本円にすると、所持金は65,000円でした。勿論、その頃の物価は今より安く、新移住者であれば、一応500カナダドルを用意するようにと勧められていました。しかし、私は175ドルで1ヶ月間は、大丈夫だと、踏んだのでした。

ところで、日本を発つ前の事を書きましょう。

母は、もう、何も言いませんでした。多分、諦めていたのでしょう。父は、本当に、一つの文句も言いませんでした。多分、父も若い頃、一度はアメリカに行きたい希望を持っていたからだと思います。ただ、三男の私に対して、好きなようにしろと言うだけでした。でも、そう言われると、かえって責任感が生まれて、独立心が湧きます。兄二人は、当時、父を助けて鉄工所を切り盛りしていました。特に何も言われませんでした。ただ、私の方から、オフクロとオヤジを頼むと言う事で、将来、何も要らないと話しました。それから、ある日、小倉の街で偶然、中学校時代の同級生の女生徒と出会って、お茶を飲んだ事があります。その時、しきりに、どうしてカナダに行くのかと聞かれました。日本でも、働く会社はいっぱいあるのに、わざわざ外国へ行く事はないと言うのです。それで、ただただ、自分の目で直接外国を見たいと言ったのですが、彼女には理解してもらえませんでした。彼女は、生まれ育った小倉から、離れたくない気持ちだと言うのです。勿論、それも、一つの人生の選択だだと思います。また、実の姉と妹は、将来どうなるのかと心配するような気配もなく、やりたいのならやればいよいよと言うスタンスでした。多分、大丈夫だと思っていたのかも知れません。

その後、東京にいた叔母さん宅にカナダに行く挨拶をしに行きました。その時、年上の従兄弟に直接意見されたのです。従兄弟の兄の方は教職にあり、私に頑張ると、笑顔で応援の言葉をかけてくれました。でも、弟は、とても厳しい口調で私に意見をしたのです。彼は私より5、6歳上で、とにかく、ボロクソに言われたのを覚えています。でも反論はせず、ただただ私は黙って聞くだけでした。

彼は、まず、私にカナダへ行って働くあてがあるのかと聞くのです。勿論、ある訳がありません。スポンサーなしの単身移住者ですので、カナダに着いたらとにかく自分の足で、仕事を探すだけです。そして、次に、大体、カナダで病気になったらどうするのかと聞くのです。誰も助けしてくれないぞ。どうする気だと言うのです。そして保険でもあるのかと、聞くのです。これには、沈黙です。第一、所持金の額を言えば、多分、お前はバカだ、狂人だと言われるに決まっています。ですから、ひたすら沈黙です。その後もお酒の勢いで意見が続きました。お前は、外国を夢見ているのだ。甘い、甘い、大甘だと言われました。寒いカナダで凍死するかも知れないし、英語も、ロクに出来ないのに、好き好んでそんな所へ行く馬鹿がいるか、と言う具合でした。でも、聞きながら、心の中で反論していました。『馬鹿野郎、お前が行くのではなく、オレが行くのだ。十分に下調べもしているし、鬼がいる国に行く訳ではないし、お金の釣られて行く訳でもなく、自分の目で実際の外国を見たいと思って行くのが何故悪いのか。オレの人生は、オレが決めるのであって、お前に決められて生きるのではない。そもそも日本ばかりが、世界ではないぞ。お前は、日本から外に出た事があるのか。アメリカを知っているのか！ 知らないくせに、偉そうに言うな。第一、カナダの国で、たくさんの人間が生きているではないか、生活しているではないか。オレだって、そこで生きられると思っている。それに、狭い日本を出て広い大陸を体験したいのだ！』と叫んでいまし

た。勿論、言葉は一つも発しませんでした。しかしながら、その後、この意見をしてくれた従兄弟とは、結局、再会する事は叶いませんでした。坂戸市で40年振りに再会した教員であった従兄弟から、弟は50代の若さで亡くなったと聞いたのです。心の中では、再会して、思い切り、昔言われた事を、言い返してやろうと、やる気満々でした。が、何だか、亡くなったと聞いて、急に可哀想に感じてしまい、言い返してやろうと思っていた自分が、何とも、つまらない男に思えてしまったのです。

いや、カナダに来られたのは、私が若かったからかも知れません。



当時の写真です。スタンレーパークです。

---- 次回へ ----